『西南アジア研究』No. 53, 2000

モンゴルのイスラーム改宗とKubrawiyya

矢 島 洋 一

序

中央アジアの著名なスーフィー，Naǧm al-dīn Kubrá（618/1221年没）はモンゴルのḪwārazm侵攻時に殉教したと言われている[1]が，その衣鉢を継ぐ所謂Kubrawiyyaのスーフィーたちの一部は，征服者たるモンゴルとしばしば関わりを持った。特に，モンゴルのイスラーム改宗にKubrawiyyaが関与していた事はしばしば指摘されるところである[Lewisohn 1992: 34; Waley 1992: 292; DeWeese 1994: 357; 安藤 1995: 253－254; 北川 1999: 141－143]。それは，ジョチ・ウルスのBerkeの改宗に関わったSayf al-dīn Bāḫarzī（659/1261年没）と，イルハンĠazanの改宗に関わったṢadr al-din Ibrāhīm Ḥammūya[2]（722/1322－23年没）の二人が共にKubrawiyyaの系統に属するスーフィーであった事を根拠にしている。しかし，モンゴルのイスラーム改宗とKubrawiyyaとを結び付ける説明は，それら二つの改宗とそれに関与したとされる二人のスーフィーをめぐる個別の事情や，当時のKubrawiyyaというṭarīqaの存在形態を考慮せずになされたものである。本稿では，上記二人のモンゴル君主のイスラーム改宗とその改宗における二人のスーフィーの役割を史料に即して再検討し，Kubrawiyyaの存在形態をも考慮しながら，それらの改宗をKubrawiyyaという特定のṭarīqaと関係付けて理解するのが無意味である事を示したい。

1） Kubráの死に関する基本的な問題点についてはMeier1957:53－60を参照。アラブ世界で書かれた人名録をはじめ，多くの史料がKubráの死をモンゴルのḪwārazm侵攻による殉教としている。しかし，Kubráに言及する最古の史料AB:355や，Kubráについてしばしば言及するKubrawiyyaのスーフィー‘Alā’ al-dawla Simnānī（736/1336年没）の諸著作にはその事は語られていない。もちろんそれらの史料における記述の欠如はKubráの殉教を疑う積極的な根拠とはなり得ないが，殉教譚というモチーフそのものの伝説的性格を考慮に入れると，Kubrá殉教のエピソードは創作の可能性もある。ペルシア語圏では，‘Abd Allāh al-Yāfi‘ī（768/1367年没）の伝えるKubrá殉教譚［MĞ: 34］がĞāmīの聖者列伝に引用されたことで［NU: 426－427］よく広まった［M‘U: 125; RĞ 2: 327; MM: 74－75］。他にはḤamd Allāh Mustawfī（750/1350年頃没）の伝えるエピソード［TG: 669］が［MN: 319］などに引用されている。なおNUの大部分は他の文献からの引用であるが，本稿で用いる‘Ābidī校訂本は校訂者註においてその典拠の多くを特定しており便利である。

2） このḤammūyaの名は史料によりḤammū’īなど様々な形で現れるが，この名の正確な綴りと読みは未だ分かっていない。ここでは仮にḤammūyaで統一しておく。なおこの名に関する先行研究の議論については，Elias 1994: 53－58を見よ。

I Berke の改宗と Sayf al-dīn Bāḫarzī

Sayf al-dīn Bāḫarzī の経歴と活動については，これまでにも多くの研究があるので，ここでは繰り返さない[3]。ここでは，Bāḫarzī と Berke との関係が史料上いかに記述されているかを確認し，問題点を明確にしたい。

Berke の改宗について最も注目すべき点は，マムルーク朝下で書かれたアラビア語史料群と，イランや中央アジアの諸史料（本稿では便宜上，それぞれ西方史料，東方史料と呼ぶことにする）においてその扱いが大きく異なるという事実であると思われる。

Bāḫarzī と Berke との関係を伝えるのは主に西方史料である。比較的早い時期の西方史料のうち，Ibn ʻAbd al-Ẓāhir（692/1292年没），Baybars al-Manṣūrī（725/1325年没）の *al-Tuḥfa al-mulūkiyya*，al-Nuwayrī（732/1332年没）等は Bāḫarzī には言及せずに Berke のイスラーム改宗を伝えるが [RZ : 88 ; TM : 36, 52 ; NA : 358－359 ; Tiz : 77, 96, 130－131][4]，多くの西方史料において Berke の改宗が語られる際には Bāḫarzī の指導によって行われた事も記されている。それらは，Buḫārā にいた Bāḫarzī（Kubrá の弟子であった事も触れられる）の手で Berke がイスラームに改宗した（aslama）事を伝えるが，その改宗に到る経緯と改宗の時期については微妙な齟齬がある。

まず Baybars al-Manṣūrī の *Zubda al-fikra* によると，Berke が改宗したのは王位に就いた時であり，敬虔なムスリムであったという。改宗に到る経緯としては，Naǧm al-dīn Kubrá が自分の murīd たちをイスラーム布教のために各地に派遣し，Buḫārā に派遣された Bāḫarzī は自分の高弟を Berke に派遣し，彼に会見して説法して改宗を勧めてその方法を説明し，Berke は彼の手でムスリムとなり，自分の配下の者たちにもイスラームを勧めたという [ZF : 14][5]。

一方 al-ʻUmarī（749/1349年没）によると，Berke が Möngke を玉座に就かせた後，帰途 Buḫārā を通り，そこで Bāḫarzī の話に感銘を受けてその手でイスラームに改宗したという [MA : 16 ; Tiz : 223][6]。

3） Bāḫarzī と彼に関する先行研究については，DeWeese 1985 : 25－38 ならびに Algar 1995 を見よ。

4） 本稿では，Berke 関係のアラビア語史料を参照する際，従来よく使われてきた Тизенгаузен 編の史料集の頁数をも併記する。ただし引用は原則として個別の刊本に拠る。

5） ...fa-lammā istaqarra bi-Buḫārā arsala tilmīḏan la-hu kabīru al-maḥalli ʻinda-hu ilá Birka yusammá al-šayḫa Ḫādima fa-ijtamaʻa bi-hi wa-waʻaẓa-hu wa-ḥabbaba la-hu al-islāma wa-awḏaḥa minhāǧa-hu fa-aslama ʻalá yadi-hi wa-istamāla Birka ʻāmmata aṣḥābi-hi ilá al-islāmi.

6） ...ṯumma aǧlasa-hu wa-ʻāda fa-lammā marra bi-Buḫārā iǧtamaʻa bi-al-šayḫi Sayf al-dīn al-Bāḫarzī min aṣḥābi šayḫi al-ṭarīqati Naǧm al-dīn Kubrá wa-ḥasuna mawqiʻu kalāmi al-Bāḫarzī ʻinda-hu wa-aslama ʻalá yadi-hi...

Ibn Ḫaldūn (808/1406年没) によれば，Bāḫarzī が Berke の許にイスラームを受け入れるよう伝言を送り，Berke は改宗した[7]後，Bāḫarzī の許を訪れて信仰を新たにした (ǧaddada al-islām) という。また，Berke の改宗は在位中のことであったという説と，Batu 時代のことであったという説があることを紹介している [K'I : 534 ; Tiz : 367]。

al-Qalqašandī (821/1418年没) の *Ṣubḥ al-a'šá* は al-'Umarī とほぼ同様の話を伝える [ṢA : 313][8]。また別の著作 *Ma'āṯir al-ināfa* においては，Sartaq の死後 Berke が王位に就いた時，彼は既に Bāḫarzī の手でイスラームに改宗していたという [MI : 99][9]。

al-'Aynī (855/1451年没) は，Baybars al-Manṣūrī の *Zubda al-fikra* とほぼ同様の話を伝えている ['IĞ : 90 – 91 ; Tiz : 478][10]。

このように，Berke の改宗は在位中の出来事であるのか，あるいはそれ以前の事であるのか，また，Berke の改宗は Bāḫarzī の積極的な布教活動によるのか，それとも Berke の方から Bāḫarzī に接近したのか，各史料の記述は異なっている。これらの史料群に直接の参照関係があるかどうかは不明だが，前代から伝えられた情報を引き継ぎつつ，変化が加えられていることが読み取れる。

以上の西方史料の記述に対して，東方史料は Berke のイスラーム信仰について全く異なった認識をしている。すなわち，Berke が成長してからのある時期にイスラームに改宗したと伝える史料はほとんどなく，多くの史料において Berke がムスリムである事はあたかも自明の事のように扱われているのである。同時代史料では例外的に Berke がムスリムになったきっかけを詳述する Ǧūzǧānī の *Ṭabaqāt-i Nāṣirī* では，Berke は父 Ǧoči の命令により生まれた時からムスリムとして育てられたとされている [ṬN : 213 ; Raverty 1881 : 1283 – 1284 ; 北川 1997 : 328 – 330][11]。

上述のように西方史料では Berke の改宗はおおむね即位前後の事とされているが，Berke が即位以前にある程度イスラームを受容していた事は Rubruck の旅行記が伝えている。

---

7) ...al-Bāḫūrī (sic.) kāna muqīman bi-Buḫārá wa-ba'aṭa ilá Birka yad'ū-hu ilá al-islāmi fa-aslama...

8) ...fa-tawaǧǧaha Birka bi-Munkūtān (sic.) fa-aǧlasa-hu 'alá al-taḫti ṯumma 'āda fa-marra fī ṭarīqi-hi bi-Buḫārā fa-iǧtama'a fī-hā bi-al-šayḫi Šams (sic.) al-dīn al-Bāḫarzī min aṣḥābi šayḫi al-ṭarīqati Naǧm al-dīn KYZY (sic.) wa-ḥādaṭa-hu fa-ḥasuna mawqi'u kalāmi-hi min-hu fa-aslama 'alá yadi-hi wa-huwa awwalu man aslama min baytī Ǧinkiz Ḫān...

9) ...wa-malaka ba'da-hu aḫū-hu Birka b. Dūšī Ḫān wa-kāna qad aslama 'alá yadi al-šayḫi Šams (sic.) al-dīn al-Bāḫarzī.

10) ZF と IĞ との関係については，ZF : intr. 33 – 34 を見よ。

11) 後世の史料では，16世紀に Ötemiš Ḫāǧī が Berke が生まれながらにしてムスリムであった事を伝え [ČN : 41 b]，17世紀になると，Berke が成長してからの一時期に Buḫārā からきた隊商の導きでムスリムになったという記述も見られる [ŠT : 172 – 173 ; 井谷 1989 : 241]。これらを含む比較的後世の記録における Berke 改宗伝説は，Vásáry 1990 で紹介されている。

Berkeの即位が1257年であるのに対して，RubruckによればBerkeは既に1253年の時点で自らをムスリムとし（facit se sarracenum），周囲に豚肉を食するのを禁じていたという［Rubruck：127］。ただしRubruckの微妙な表現からは，Berkeが確実にムスリムとなっていたかどうかは不明である［Rubruck：127 n. 2］。

Richardは，西方史料とĞūzğānīの記述を解釈する際，NasawīのḪwārazmšāh Ğalāl al-dīn伝の記述や系譜集*Mu'izz al-ansāb*を根拠に，BerkeがḪwārazmšāhの孫である可能性をも示唆しながら，Berkeが幼少の頃からムスリムの中で育てられた事を認め，成長してから改めてBāḫarzīの指導の許で信仰告白を行ったとしている［Richard 1967］。これは今のところ，Rubruckの微妙な表現も含めて東西史料に見える記述を最も整合的に説明する解釈であり，かつ妥当な解釈といえよう。Berkeのイスラーム信仰は改宗を境に一時に身に付けたものではなく，ある程度段階を追って形成されたものなのである。

本稿での問題はBāḫarzīとBerkeとの関わりであるが，西方史料と異なり，東方史料には両者の関係を直接に名を挙げて言及する史料は少ない。ĞūzğānīはBerkeがBuḫārāのウラマーと関わった事を伝えるがBāḫarzīの名には言及せず，ĞāmīはBāḫarzīが帝王（pādišāh）と関わりを持った事を伝えるがBerkeの名には言及していない［NU：433－434］[12]。ただしĞamāl al-Qaršīは両者の関係を名を挙げて直接に伝え［MṢ：136］，時代はやや下るがÖtemiš Ḥāğīもが Berkeがムスリムとして生まれ，長じてBāḫarzīの弟子となったと伝えており［ČN：41 b］，BerkeがBuḫārāにいたBāḫarzīと関係を持っていた事は事実であると認められる[13]。しかしここで留意すべきことは，東方史料においては成人してからのBerkeの改宗についてはほとんど言及しておらず[14]，当然BāḫarzīもBerkeの改宗に関与したという認識がない事である。また，以上の史料の多くはBerkeに焦点を当てた記述であるが，Bāḫarzīに焦点を当てた史料，すなわち上記のĞāmīの記述をはじめとする様々なスーフィー文献においても，Bāḫarzīは著名なスーフィーとしてしばしば言及される人物でありながら，Berkeとの関わりについて言及されることはない。スーフィズムの世界においては，Bāḫarzīはモンゴル君主Berkeを改宗させたスーフィーとしては認識されていないのである。

以上の史料状況をまとめると，西方史料において述べられている「Berkeが（一定の年齢に達してから）Bāḫarzīの手でムスリムとなった」という情報は東方史料によって確認することは出来ず，BerkeとBāḫarzīの間に何らかの形で交流があった事のみ確認出来ること

12）前述のようにNUの典拠は多く特定されているが，Bāḫarzīの項の典拠は今のところ不明である。

13）BāḫarzīはBerke以外のモンゴルの王族とも関わりを持っていた。BāḫarzīとSorqoqtaniの関係を伝えたĞuwaynīの有名な記述を想起せよ［TĞG：8－9；Boyle 1997：552－553］。

14）例外は上述のAbū al-Ġāzīの ŠTの記述であるが，後代のものであり，西方史料の影響を受けているのかもしれない。

になる。そして，所与のデータをその出自を無視していかに整合的に解釈するかという点では前述の Richard の解釈が最も妥当であるといえるが，ここで問題にすべきは東西史料における差異であり，その差異が生じた事情を検討すべきであろう。

周知のように Berke はイランを支配する Hülegü や Abaqa との戦いに際してマムルーク朝と同盟関係を結んだ。イスラーム世界を次々と支配下に入れ，アッバース家カリフをも殺害したモンゴルに対する戦闘の最前線にいるイスラーム国家マムルーク朝は，チンギス・ハン家の中にムスリムの同盟者を見付けたのである。マムルーク朝史料における Berke の敬虔さへの讃美はそのような背景を反映している。さらに言えば，マムルーク朝史料のみに残る Berke の改宗譚はムスリムの同盟者に対する Berke の側からのアピールの結果であると解釈することが可能である。政治的な戦略として自らのイスラーム信仰を宣伝する Berke には，それを補強するイスラームの権威的人物が必要だったのであり，そのために交流のあった Bāḫarzī の名を利用したのではなかろうか。段階的に形成された Berke のイスラーム信仰において Bāḫarzī が何らかの指導的な役割を果たしていた事は確かであろうが，それは改宗の指導という単純なものではなく，少なくとも Berke の改宗における Bāḫarzī の関与は「改宗」そのものではなくマムルーク朝下における「改宗譚」の形成において理解すべきであると考えられる。

II　Ġazan の改宗と Ṣadr al-dīn Ibrāhīm Ḥammūya

Ġazan のイスラーム改宗はイルハン朝史上一つの転機となる重要な事件であった。最近の研究により，Ġazan の改宗は政敵 Baidu との争いの中で既にイスラームを受容していたモンゴル軍の支持を得るための政治的判断であった，というのが定説となりつつある[15]。そして改宗自体が曖昧な Berke の場合と異なり，Ġazan が改宗を行った事，またその時期やそれに立ち会ったのがṢadr al-dīn Ibrāhīm であった事はほぼすべての史料の一致して伝えるところであり問題ない[16]が，本稿での問題は，なぜそれがṢadr al-dīn であったのか，ということである。

Ġazan の改宗におけるṢadr al-dīn の役割について，Rašīd al-dīn の *Ǧāmi' al-tawārīḫ* は

15) Melville 1990 ならびにその意義を強調する岩武 1997 : 020 – 021 n. 3 を見よ。なお，後世のものであるがイルハン朝時代についても独特の記事を載せる RǦ には，逆に軍隊が kāfir であったため恐れてイスラーム信仰を表明するのを躊躇うĠazan を励ますウラマーの話が見える [RǦ 1 : 339 – 340]。また同書は Tabrīz の naqīb がĠazan の改宗に大いに関与したという記事を載せる。その naqīb が具体的にどう関わったのかは述べられていないが，彼は燃え盛る火に入っても barakat により体が燃えなかったほどの高徳の人物であったという [RǦ 1 : 155 – 156]。

16) Sa'd al-dīn Qutluq Ḫwāǧa Ḫālidī に帰した TG : 675 の誤りについては，Melville 1990 : 161, 173 n. 13 を見よ。

šayḫ-zāda-yi buzurgwār Ṣadr al-dīn Ibrāhīm b. quṭb al-awliyā' šayḫ Sa'd al-dīn Ḥammūyī が御前にいた。彼はしばしば付き従っていた。帝王はいつも彼に，イスラーム信仰について解説するよう求めていた。…(中略)…かくしてĠazan Ḫan は694年Ša'bān 月上旬に šayḫ-zāda Ṣadr al-dīn Ibrāhīm Ḥammūyī の立会いのもと，全アミールと共に tawḥīd の誓言を述べ，皆がムスリムとなった。[ĞT : 1255]

と述べるのみで，Ṣadr al-dīn が šahāda の立会人として選ばれた理由や，そのきっかけとなった随行の理由については触れていない。*Tārīḫ-i Banākatī* も唐突にṢadr al-dīn の名に言及するのみで，Ṣadr al-dīn が選ばれた理由には触れていない [TB : 454－455]。しかしこの理由については，Melville が紹介する al-Ğazarī の *Ğawāhir al-sulūk* にṢadr al-dīn 自身の言葉を伝えるものとして

私が故郷から巡礼に出かけていた当時，Ġazan と Baidu の間に不和があった。私はそのどちらに加わるつもりもなかったが，当時の混乱を恐れてやむなくĠazan の軍隊に同行した。[Melville 1990 : 162]

とあり，この時Ṣadr al-dīn がĠazan に同行していたのは当時の内乱状態にあって巡礼の旅の安全を確保するためであった事が分かる。従って，Ġazan の改宗はṢadr al-dīn の積極的な布教活動によるものではなく，政治的判断によるĠazan の改宗が行われようとする時に折しも同行していた高位の宗教者がṢadr al-dīn であったと考えるべきであろう。なお，Ġazan の改宗に際してṢadr al-dīn を Baḥrābād からアゼルバイジャン (!) に呼び寄せたというティムール朝期の詩人伝 *Taḏkira al-šu'arā'* の逸話 [TŠ : 160] はĠazan の改宗に関してしばしば引用されるが [Trimingham 1971 : 91 ; 北川 1999 : 140]，以上のことからも後世の創作であることは明らかである。

Ġazan の改宗以前のṢadr al-dīn のモンゴルとの関わりは，史料上ではほとんど確認出来ない。上記 *Ğāmi' al-tawārīḫ* の「しばしば付き従っていた bīštar-i awqāt mulāzim」という言葉の他，アラブの人名辞典にṢadr al-dīn がモンゴル宮廷で権力を振るった 'Aṭā Malik Ğuwaynī の娘婿であったという記述[17]や，Ṣadr al-dīn の父 Sa'd al-dīn が若干のモンゴルの改宗に関わったという記述が僅かに見える [WW 5 : 101][18] のみである。これらの記述からṢadr al-dīn が改宗以前の Ġazan との密接な関係を持っていた事を確認することは出来ず，Ṣadr al-dīn がĠazan の šahāda に立ち会ったのは偶然の要素が大きかったと考

17) この事は Melville 1990 : 165 で言及されており，Aubin 1995 : 59 ; 岩武 2000 : 98 n. 15 にも継承されている。これは WW 6 : 142 ; DK : 69 に見える記事で，al-Ẓahīr al-Kāzarūnī を情報源としている（この人物については van Ess 1976 : 266 を参照)。この事は管見の限りではペルシア語史料には言及がない。

18) ... wa-iğtama'a bi-hi ğamā'atun min al-tatāri wa-aslama 'alá yadi-hi ġayru wāḥidin min-hum.

えられる。

Ⅲ　Kubrawiyya への帰属の問題

ここで，スーフィーがあるṭarīqa へ帰属するという事がいかなる意味をもつのか，再検討しておきたい。Kubrawiyya，Ṣafawiyya，Naqšbandiyya，Šāḏiliyya などの名称で呼ばれる諸 ṭarīqa は，ṭarīqa という同一のカテゴリーで並列的に扱う事が出来ぬほど異なった存在形態を持っており，自ずとそれらへの帰属の意味も異なる。そのためここでは 13 世紀の Kubrawiyya の場合に限って検討する。

Ḫwārazm において Kubrá の教えを受けたスーフィーたちは，多くが Kubrá 存命中に各地に散り，それぞれ独自の活動を行った。我々は，それらのスーフィーたちならびにその弟子筋のスーフィーたちの総体を Kubrawiyya と称しているのである。しかし，各地で活動するそれらのスーフィーたちの間には何ら統一的な組織は存在しなかった。それらのスーフィーたちは各地で弟子を集め，修行活動を行っていたという意味でそれぞれ独自の「教団」を形成していたといえるが，それらを統一する「クブラウィー教団」はそもそも存在しないのである[19]。Kubrawiyya という名称自体も同時代史料には用例がなく，あくまで後世の分派学的概念である[20]。またそれらのスーフィーたちに Kubrawī といった nisba が付された例もない。従ってあるスーフィーを Kubrawiyya に属するとする明確な基準は存在しないのである。その上で我々が Kubrawiyya という集団を想定し，スーフィーたちをそれに帰属せしめるなら，その基準は第一に Kubrá に連なる silsila の存在，第二に教義・修行法の継承，と考えるのが適当であろう。

直接 Kubrá の教えを受けた Bāḫarzī に関してはほとんど問題ない[21]としても，Ṣadr

19）スーフィー教団の研究は，「教団 order」の語義を厳密に定義しないまま行われてきており，原語たるṭarīqa という言葉の多義性と相俟って，「スーフィー教団」の言葉は極めて曖昧な概念となっている。「ṭarīqa＝○○iyya＝○○教団」という理解は多くの場合妥当ではない。特に問題となるのは，名祖を共有しながら，なんら具体的な関わりを持たない諸組織の場合である。例えば世界各地に存在する Naqšbandiyya を「ナクシュバンディー教団」と称するのはあたかも統一的な組織を持った集団が存在するかのような印象を与える。むしろ「スフラワルディー系教団」「リファーイー系教団」［川本 1989：169］，「クブラー流」［井筒 1980：36］といった名称の方が実態に近い。

20）Trimingham 1971：56 などで使われている Nūriyya，Rukniyya といった Kubrawiyya の分派名も少なくとも 13 世紀の史料には見えない。

21）Kubrawiyya の教義の特徴の一つとして，ḫalwa の重視とその際に守るべき「八つ（あるいは十）の規定」がある［矢島 1998：128 n. 12］。Bāḫarzī を通じてその孫 Abū al-Mafāḫir Yaḥyá Bāḫarzī に継承された Kubrá の ḫalwa については，FA：314 ff. を見よ。同書には「šayḫ Naǧm al-dīn Kubrá と šayḫ al-ʿālam Sayf al-dīn Bāḫarzī の maḏhab」という表現も見える［FA：300］。

al-dīn と Kubrawiyya との関係は極めて曖昧である。スーフィズム史上有名なのは，Ṣadr al-dīn よりむしろその父親の Sa'd al-dīn であり，Kubrá の教えを受けたのもこの父親である[22]。しかしその父 Sa'd al-dīn は，詳細に検討すると単純に Kubrawiyya のスーフィーと見做すことは出来ないのである[23]。Sa'd al-dīn が Kubrawiyya のスーフィーと見做されてきた根拠はもちろん Sa'd al-dīn が直接に Kubrá の教えを受けたからであり，その事実自体に疑念の余地はない[24]。また，後のスーフィー界においても Sa'd al-dīn は Kubrá の弟子として認識され，Ǧāmī の *Nafaḥāt al-uns* をはじめ多くの文献において Sa'd al-dīn は Kubrá の弟子たちの中に列せられている。ここで Sa'd al-dīn を Kubrawiyya のスーフィーと見做すことに疑義を抱く根拠は，以下の三点である。

第一に，Sa'd al-dīn が Kubrá 以外のスーフィーの教えをも受けている事である。Sa'd al-dīn の一族はもともとウラマー的スーフィー[25]の家系[26]であり，Sa'd al-dīn は父の従兄弟 Ṣadr al-dīn Muḥammad（617/1220 年没）からも ḫirqa を受けている[27]のをはじめ，数人のスーフィーの教えを受けている[28]。スーフィーが複数の師から教えを受けるのは普通に行

22） Sa'd al-dīn については Hirawī 1362 š.; Elias 1994: 58－66 が詳しく，Landolt 1994 も簡潔ながら関連文献をよく挙げてあり，参考になる。

23） Sa'd al-dīn，Ṣadr al-dīn 親子と Kubrawiyya との関係に否定的な見解を示すものとして Elias 1994: 70－75 があり，本稿でも参考にした。またこの二人の一族については Sa'īd Nafīsī, "Ḫāndān-i Sa'd al-dīn-i Ḥamawī," *Kunǧkāwī-hā-yi 'ilmī wa adabī* 83, Tihrān 1329 š./1950 という研究，また Tihrān 大学中央図書館に Sa'd al-dīn の曾孫が書いた *Murād al-murīdīn* なる伝記の写本があるというが，共に未見である。後者については Dāniš-pažūh 1344 š. をも見よ。

24） Kubrá が Sa'd al-dīn に与えた iǧāza の写本も現存している［Molé 1962: 8］。

25） 周知のように，ウラマーとして知られる人物がスーフィズムを修めている事や，スーフィーとして知られる人物が法学その他の学問を修めている事はよくあり，ウラマーとスーフィーの区別はしばしば曖昧であるが，筆者はスーフィズムを自らのアイデンティティにおいて主とするか従とするかの区別は存在したと考えており，本稿ではスーフィズムを主とするウラマーを仮にウラマー的スーフィーと称しておく。

26） その一族は Ḫurāsān の Ǧuwayn の Baḥrābād を故地とするウラマー的スーフィー（シャーフィイー派）の家系であった。Sa'd al-dīn の祖父の兄弟 Abū al-Fatḥ 'Umar（577/1181 年没）は Dimašq に移住し，ザンギー朝 Nūr al-dīn によってスーフィーを統括する šayḫ al-šuyūḫ 職に任じられた。その地位はアイユーブ朝時代にも認められ，彼の子孫は 13 世紀の Dimašq において šayḫ al-šuyūḫ 職をほぼ独占した［Pouzet 1991: 213－215］。この一族は，Sellheim 1976: 88－89; Gilbert 1977: 186; Pouzet 1991: 448; Elias 1994: 57 で系図化されており，うち Sellheim のものが最も詳しい。なおこの一族に属する歴史家 Sa'd al-dīn Ḫaḍir（674/1276 年没）については，Cahen 1977 を見よ。

27） 前述 *Murād al-murīdīn* に見える情報である［Dāniš-pažūh 1344 š.: 301］。Elias 1994: 58 は NU を典拠として挙げるが，当該箇所にそのような記述はない。なお Ṣadr al-dīn Muḥammad は前注に挙げた Abū al-Fatḥ 'Umar の息子である。

28） *Murād al-murīdīn* に基づき Dāniš-pažūh が挙げているのは，Ṣadr al-dīn Muḥammad と Kubrá の他に，Mu'īn al-dīn Ǧāǧarmī, Šihāb al-dīn Ḫīwaqī, Ibn 'Arabī, Ṣadr al-dīn Qūnawī, Šihāb al-dīn Abū Ḥafṣ 'Umar Suhrawardī である［Dāniš-pažūh 1344 š.: 301］。Sa'd al-dīn が Suhrawardī の教えを受けていたとすると，宗派は対立するもの，とアプリオリに規定してイル↗

われていた事であったから，Sa'd al-dīn が他のスーフィーでなく専ら Kubrá の後継者の一人であることを認めるには，その教義における Kubrá の影響を確認しなければならない。

第二はその Sa'd al-dīn の思想傾向である。Sa'd al-dīn の思想は文字の秘教的解釈を重視するものであり[29]，それは Kubrá をはじめ他の Kubrawiyya のスーフィーたちの思想には見られないものである。Sa'd al-din の思想はほとんど未解明であるが，今のところ Sa'd al-dīn が Kubrá の教義を受け継いでいたとする証拠はないのである。

第三に，傍証的であるが，Sa'd al-dīn が同時代の Kubrawiyya のスーフィーたちと反目していたことを示唆する証言が若干存在することである［Dāniš-pažūh 1971: 170; ČM: 256－257; Elias 1995: 44］。

このように，Sa'd al-dīn を単純に Kubrawiyya のスーフィーとして扱うのには問題があると言わねばならない。そして，我々はこの父 Sa'd al-dīn との血縁のみを根拠に，息子 Ṣadr al-dīn をも Kubrawiyya のスーフィーと見做してきたのである。仮に Sa'd al-dīn を Kubrawiyya のスーフィーと認め得たとしても，その息子である事のみを理由に Kubrawiyya に属すると考えることが出来るのであろうか。前述のように，彼らは本来スーフィーの家系に属している上，父 Sa'd al-dīn は一族の人間をはじめ Kubrá 以外の数人のスーフィーの教えをも受けているから，Kubrá と父との関係のみから Ṣadr al-dīn を Kubrawiyya のスーフィーと見做すことは出来ない。また，東西の文献，特にスーフィー列伝やウラマー伝における Sa'd al-dīn，Ṣadr al-dīn を見ると，その扱いが非常に異なっている事に気付く。Sa'd al-dīn は東方のスーフィー文献，特にスーフィー列伝の類には必ずといってよいほど取り上げられる著名なスーフィーであるのに対して，息子 Ṣadr al-dīn はほとんど無名である。逆に，アラブ世界で書かれた伝記集においては，Sa'd al-dīn に関する情報がほとんど得られないのに対し，Ṣadr al-dīn ははるかに詳しく記述され[30]，Ṣadr

---

↘ハン時代における Suhrawardiyya と Kubrawiyya の対立を想定する北川 1999: 142 の説明は再検討の必要があろう。なお同頁における「サドルッディーンはガザンの治世に死亡しているという」とする記述は 140 頁における Ṣadr al-dīn の没年を 1332 年とする記述と矛盾しているが，どちらも誤りで正しい没年は 722/1322－23 年である［WW 6: 142; DK: 70; MF 3: 34］。その他にも同論文には事実誤認や誤植が多く，利用には注意が必要である。

29) Sa'd al-dīn が残した多くの著作［Hirawī 1362 š.: 36－52; Elias 1994: 61－66］は未だ本格的に研究されていないが，管見の限り唯一出版されている MT は文字の秘教的解釈をテーマとするものである。'Alā' al-dawla Simnānī もしばしば Sa'd al-dīn の文字解釈について証言しており，それが Sa'd al-dīn の思想の目立った特徴であった事が窺われる［ČM: 101, 172］。また Sa'd al-dīn は nubuwwa と walāya に関して文字解釈に基づく独自の理論を展開して物議を醸していた［ČM: 172; IK: 316, 320－321; KA: 54－55］。なお Ridgeon は Sa'd al-dīn の弟子とされる 'Azīz Nasafī の思想における Kubrawiyya の影響について検討するが［Ridgeon 1998: 122 etc.］，確実な証拠はない。

30) 例えば WW における両者の扱いの相違［WW 5: 101; WW 6: 141－142］を見よ。また，Ṣadr al-dīn は al-Ḏahabī の師の一人に数えられているが［TḤ: 1505－1506］，al-Ḏahabī の別の著書 TI における Sa'd al-dīn の扱いは［TI 641－650: 432］は，その一族の人々の扱い［TI 571－80: ↗

al-dīn がアラブ世界でハディース学者としてある程度名を成していた事がわかる[31]。すなわち，Sa'd al-dīn は主に東方で活動したスーフィーであり，Ṣadr al-dīn は主に西方で活動したウラマーであった。Ṣadr al-dīn は父 Sa'd al-dīn とは全く違った道を歩んだ人物だったのである。

このように，父 Sa'd al-dīn と Kubrawiyya との関係の曖昧さ，そしてその親子の性質の相違という二重の理由により，Ṣadr al-dīn を Kubrawiyya のスーフィーと見做す事はほとんど不可能である。従って，Ġazan の改宗が Kubrawiyya のスーフィーによって行われたという前提自体，成立しない事になる。史料上に見る限り，Ġazan の改宗においてはṢadr al-dīn が高名なスーフィー Sa'd al-dīn の息子であった事にも一定の意味があったとも考えられるものの[32]，単純に Kubrawiyya のスーフィーの手でĠazan の改宗が行われたとする通説は修正の必要があろう。

結

以上の考察から，Berke とĠazan という二人のモンゴル君主の改宗を Kubrawiyya の活動として理解することが出来ないのは明らかであろう。Kubrawiyya は何ら実体を持った組織ではなかったから，Kubrawiyya のスーフィーの活動を考える場合には，Kubrawiyya の活動ではなくそのスーフィー個人の活動として捉えるべきである。加えて，本稿で見てきたように，Bāḫarzī が関与したとされる Berke の改宗はその関与自体が不明確であり，Ġazan の改宗に関与したṢadr al-dīn は Kubrawiyya への帰属自体が根拠薄弱である。従って，両モンゴル君主の改宗が Kubrawiyya によって行われたとする説明は，それぞれ二重の誤りを犯している事になる。さらにそれら二つの改宗を Kubrawiyya との関係を根拠に結びつけ，この時代にモンゴル君主の改宗が Kubrawiyya によって行われていたと考えれば，三重の誤りを犯す事になる。Berke の「改宗譚」とĠazan の「改宗」はそれぞれ複雑な政治的背景によって生じた事であった。全く異なった事情によりなされ，また逸話として今日に伝わった二つの改宗において，二人のスーフィーと Kubrawiyya との関係——特にṢadr al-dīn においてはほとんど認められない関係——を抽象し関連付けて論ずる事に

↘ 242－244；TI 581－590：299－300；TI 601－610：162；TI 611－620：214, 376－377；TI 621－630：160；TI 631－640：299－301, 427；TI 641－650：123；TI 671－680：303－304］と比べても極端に軽い。

31) 現在知られている唯一のṢadr al-dīn の著作 *Farā'id al-simṭayn* は，預言者一族の美徳に関する伝承の集成であるという。この *Farā'id al-simṭayn* については，Ma'ānī 1972：879－886 を見よ。Elias 1994：69 も二次的な文献に拠りながらこの著作に言及している。

32) Ġazan は改宗の儀式において Sa'd al-dīn の衣を着用したといい［TB：454；Melville 1990：168］，Rašīd al-dīn はṢadr al-dīn の名に šayḫ-zāda の敬称を付している［ĞT：1255］。

意味はないのである。

その上で Bāḫarzī と Ṣadr al-dīn に共通点を見出すならば，それは両者が正統的なイスラーム諸学を修めたウラマーでもあった事であろう。マムルーク朝史料に残る Berke の「改宗譚」が Berke による自らのイスラーム信仰の宣伝の結果であったとすれば，それを補強するに相応しいのは正統的なウラマーであったはずである[33]。また，Ġazan の改宗を頂点とするイルハン朝下でのモンゴルのイスラーム化は，従来言われていたようなシャーマニズム的要素を持つスーフィーの影響ではなく，より正統的なイスラームに基づくものであった事が最近主張され始めている［Amitai-Preiss 1999；岩武 2000：78］。そこにモンゴルのイスラーム信仰の特徴を見出す事もできよう。しかしモンゴルのイスラーム化におけるウラマーあるいはスーフィーの役割は二人の君主の事例のみから論ずべき問題ではなく，本稿の扱う範囲を越える事になる。

参考文献

AB：Zakarīyā' b. Muḥammad b. Maḥmūd al-Qazwīnī, *Āṯār al-bilād wa-aḫbār al-'ibād*, ed. Ferdinand Wüstenfeld, Göttingen, 1848, rep. Frankfurt am Main, 1994.

ČM：Amīr Iqbāl Siǧistānī, *Čihil maǧlis*, ed. Naǧīb Māyil Hirawī, Tihrān, 1366 š.

ČN：Ötemiš Ḥāǧī, *Čingīz nāma*, ed. В. П. Юдин, Алма-Ата, 1992.

DK：Ibn Ḥaǧar al-'Asqalānī, *al-Durar al-kāmina*, vol. 1, ed. Muḥammad Sayyid Ǧād al-Ḥaqq, al-Qāhira, 1385/ 1966.

FA：Abū al-Mafāḫir Yaḥyá Bāḫarzī, *Fuṣūṣ al-ādāb*, ed. Īraǧ Afšār, Tihrān, 1345 š.

ǦT：Rašīd al-dīn Faḍl Allāh Hamadānī, *Ǧāmi' al-tawārīḫ*, ed. Muḥammad Rawšan & Muṣṭafá Mūsawī, 4 vols., Tihrān, 1373 š.

'IǦ：Badr al-dīn Maḥmūd al-'Aynī, *'Iqd al-ǧumān fī tārīḫ ahl al-zamān*, ed. Muḥammad Muḥammad Amīn, vol. 1, al-Qāhira, 1407/ 1987.

IK：'Azīz al-dīn Nasafī, *Kitāb insān al-kāmil* etc., ed. Marijan Molé, Tihrān & Paris, 1341 š./

33）正統的なイスラーム諸学を修めたウラマーでもあった事は，モンゴル支配時代にイランや中央アジアを中心に活動した Kubrawiyya のスーフィーたちに共通する特徴であった。Kubrá 自身ハディース学者として出発しており，Kubrá をはじめ Bāḫarzī，Maǧd al-dīn Baġdādī，Nūr al-dīn Isfarā'inī，'Alā' al-dawla Simnānī，'Alī Hamadānī らは，アラビア語やペルシア語で著述を行う知識人であった。さしあたり Kubrá の著作については Meier 1957：47－51，Baġdādī の著作については DeWeese 1985：44，Isfarā'inī の著作については Landolt 1986，Simnānī の著作については Elias 1995：165-212，Hamadānī の著作については Teufel 1962：43－60，Bāḫarzī の著作については Waley 1992：292－294 をそれぞれ参照。著作が知られていない者としては，Raḍī al-dīn 'Alī Lālā，Aḥmad Ǧūrfānī らがいる。一方で Kubrawiyya は脱俗的な神秘修行に没入する傾向があったが［DeWeese 1988：78－81；矢島 1998：142］，神秘主義への傾倒は反正統的である事を意味しない。

1962.

KA : Nūr al-dīn 'Abd al-Raḥmān Isfarā'inī, *Kāšif al-asrār*, in Landolt 1986.

K'I : 'Abd al-Raḥmān Ibn Ḫaldūn, *Kitāb al-'ibar wa-dīwān al-mubtadā wa-al-ḫabar fī ayyām al-'arab wa-al-'ağam wa-al-barbar wa-man 'āṣara-hum min ḏawī al-sulṭān al-akbar*, vol. 5, Bayrūt : Mu'assasa al-A'lamī li-l-Maṭbū'āt, 1971.

MA : Šihāb al-dīn Aḥmad al-'Umarī, *Masālik al-abṣār fī mamālik al-amṣār*, in Klaus Lech, *Das mongolische Weltreich : Al-'Umarī's Darstellung der mongolischen Reiche in seinem Werk Masālik al-abṣār fī mamālik al-amṣār*, Wiesbaden, 1968.

MF : Faṣīḥ Ḫwāfī, *Muğmal-i Faṣīḥī*, 3 vols., ed. Maḥmūd Farruḫ, Mašhad, 1339 – 1341 š.

MĞ : 'Abd Allāh al-Yāfi'ī, *Mir'āt al-ğanān wa-'ibra al-yaqẓān*, vol. 4, Bayrūt : Dār al-Kutub al-'Ilmiyya, 1417/1997.

MI : Aḥmad b. 'Alī al-Qalqašandī, *Ma'āṯir al-ināfa fī ma'ālim al-ḫilāfa*, ed. 'Abd al-Sattār Aḥmad Farrāğ, Bayrūt : 'Ālam al-Kutub, n. d.

MM : Nūr Allāh Šūštarī, *Mağālis al-mu'minīn*, vol. 2, Tihrān, 1376.

MN : 'Alīšīr Nawā'ī, pers. tr. Ḥakīm Šāh Muḥammad Qazwīnī, *Mağālis al-nafā'is*, ed. 'Alī Aṣġar Ḥikmat, Tihrān, 1363 š.

MṢ : Ğamāl al-Qaršī, *Mulḥaqāt al-ṣurāḥ*. In : В. Бартольд, Туркестан в эпоху монгольского нашествия, I, Тексты, Санкт-Петербург, 1898.

MT : Sa'd al-dīn Ḥammūya, *al-Miṣbāḥ fī al-taṣawwuf*, ed. Nağīb Māyil Hirawī, Tihrān, 1362 š.

M'U : Kamāl al-dīn Ḥusayn Gāzurgāhī, *Mağālis al-'uššāq*, ed. Ġulāmriḍā Ṭabāṭabā'ī Mağd, n. p., 1376 š. (čāp-i 2).

NA : Šihāb al-dīn Aḥmad b. 'Abd al-Wahhāb al-Nuwayrī, *Nihāya al-arab fī funūn al-adab*, vol. 27, ed. Sa'īd 'Āšūr, al-Qāhira, 1405/ 1985.

NU : Nūr al-dīn 'Abd al-Raḥmān Ğāmī, *Nafaḥāt al-uns min ḥaḍarāt al-quds*, ed. Maḥmūd 'Ābidī, Tihrān, 1370 š.

RĞ : Ḥusayn Karbalā'ī Tabrīzī, *Rawḍāt al-ğinān wa-ğannāt al-ğanān*, 2 vols., ed. Ğa'far Sulṭān al-Qurrā'ī, Tihrān, 1344 š.

Rubruck : Peter Jackson (tr.), *The Mission of Friar William of Rubruck : His Journey to the Court of the Great Khan Möngke 1253–1255*, London, 1990.

RZ : Muḥyī al-dīn Ibn 'Abd al-Ẓāhir, *al-Rawḍ al-zāhir fī sīra al-malik al-ẓāhir*, ed. 'Abd al-'Azīz al-Ḫuwayṭir, al-Riyāḍ, 1396/ 1976.

ṢA : Aḥmad b. 'Alī al-Qalqašandī, *Ṣubḥ al-a'šá fī ṣinā'a al-inšā*, vol. 4, ed. Muḥammad Ḥusayn Šams al-dīn, Bayrūt : Dār al-Fikr, 1987.

ŠT : Abū al-Ġāzī Bahādur Ḫān, in P. I. Desmaisons, *Histoire des Mongols et des Tatares par Aboul-Ghazi Béhadour Khan*, St. Pétersbourg, 1871 – 1874, rep. Amsterdam, 1970.

TB : Faḫr al-dīn Dāwūd Banākatī, *Tārīḫ-i Banākatī* (=*Rawḍa ūlī al-albāb fī ma'rifa al-tawārīḫ*

wa-al-ansāb), ed. Ča'far Ši'ār, Tihrān, 1348 š./ 1969.

TḤ: Šams al-dīn Muḥammad al-Ḏahabī, *Taḏkira al-ḥuffāẓ*, vol. 4, 3 rd ed., Ḥaydarābād, 1377/ 1958.

TG: Ḥamd Allāh Mustawfī Qazwīnī, *Tārīḫ-i guzīda*, ed. 'Abd al-Ḥusayn Nawā'ī, Tihrān, 1364 š. (čāp-i 3).

TǦG: 'Alā' al-dīn 'Aṭā Malik Ǧuwaynī, *Tārīḫ-i ǧahān-gušā*, vol. 3, ed. Mīrzā Muḥammad Qazwīnī, Leyden & London, 1937.

TI: Šams al-dīn Muḥammad al-Ḏahabī, *Tārīḫ al-islām wa-wafayāt al-mašāhīr wa-al-a'yān*, ed. 'Umar 'Abd al-Salām Tadmurī, Bayrūt: Dār al-Kitāb al-'Arabī, 1987 –.

Tiz: В. Тизенгаузен, Сборник материалов относящихся к истории Золотой Орды, I, Извлечения из сочинений арабских, Санкт-Петербург, 1884.

TM: Baybars al-Manṣūrī, *al-Tuḥfa al-mulūkiyya fī al-dawla al-turkiyya*, ed. 'Abd al-Ḥamīd Ṣāliḥ Ḥamdān, al-Qāhira: al-Dār al-Miṣriyya al-Lubnāniyya, 1407/ 1987.

ṬN: Minhāǧ Sirāǧ Ǧūzǧānī, *Ṭabaqāt-i Nāṣirī*, ed. 'Abd al-Ḥayy Ḥabībī, Tihrān, 1363 š.

TŠ: Dawlatšāh Samarqandī, *Taḏkira al-šu'arā'*, ed. Muḥammad Ramaḍānī, Tihrān, 1338 š.

WW: Ṣalāḥ al-dīn Ḫalīl b. Aybak al-Ṣafadī, *al-Wāfī bi-al-wafayāt*, vol. 5, 6, ed. Sven Dedering, Wiesbaden, 1981.

ZF: Baybars al-Manṣūrī, *Zubda al-fikra fī tārīḫ al-hiǧra*, ed. Donald S. Richards, Berlin, 1998.

Algar, Hamid (1995) SAYF AL-DĪN BĀKHARZĪ, *EI*[2].

Amitai-Preiss, Reuven (1999) Sufis and Shamans: Some Remarks on the Islamization of the Mongols in the Ilkhanate. *JESHO* 42 (1).

安藤志朗 (1995) トルコ系諸王朝の国制とイスラーム 堀川徹 (編)『講座イスラーム世界 3 世界に広がるイスラーム』栄光教育文化研究所.

Aubin, Jean (1995) *Émirs mongols et visirs persans dans les remous de l'acculturation*, Studia Iranica, Cahier 15, Paris.

Boyle, John Andrew (1997) *Genghis Khan: The History of the World-Conqueror by 'Ala-ad-Din 'Ata-Malik Juvaini*, Manchester, 1958, with a new introduction and bibliography by David O. Morgan, Manchester.

Cahen, Claude (1977) Une source pour l'histoire ayyūbide: les mémoires de Sa'd al-dīn ibn Ḥamawiya Djuwaynī. *Les peuples musulmans dans l'histoire médiévale*, Damas.

Dāniš-pažūh, Muḥammad Taqī (1344 š.) Intiqād-i kitāb: Kašf al-ḥaqā'iq tālīf šayḫ 'Abd al-'Azīz b. Muḥammad Nasafī. *Farhang-i Īrān Zamīn* 13.

Dāniš-pažūh, Muḥammad Taqī (1971) Ḫirqa-yi hazār-i mīḫī. Mahdī Muḥaqqiq & Hermann Landolt (ed.), *Collected Papers on Islamic Philosophy and Mysticism*, Tihrān.

DeWeese, Devin (1985) *The "Kashf al-Hudā" of Kamāl ad-Dīn Ḥusayn Khorezmī: A Fifteenth-Century Sufi Commentary on the Qaṣīdat al-Burdah in Khorezmian Turkic*, Ph. D. Disser-

tation : Indiana University.

DeWeese, Devin (1988) The Eclipse of the Kubravīyah in Central Asia. *Iranian Studies* 21 (1-2).

DeWeese, Devin (1994) *Islamization and Native Religion in the Golden Horde : Baba Tükles and Conversion to Islam in Historical and Epic Tradition*, Pennsylvania.

Elias, Jamal J. (1994) The Sufi Lords of Bahrabad : Sa'd al-Din and Sadr al-Din Hamuwayi. *Iranian Studies* 27 (1-4).

Elias, Jamal J. (1995) *The Throne Carrier of God : The Life and Thought of 'Alā' ad-dawla as-Simnānī*, New York.

Gilbert, Joan Elizabeth (1977) *The Ulama of Medieval Damascus and International World of Islamic Scholarship*, Ph. D. Dissertation, University of California, Berkeley.

Hirawī, Nağīb Māyil (1362 š.) Muqaddima in MT.

井谷鋼造 (1989) モンゴル人のイスラーム化 川床睦夫 (編)『シンポジウム「イスラームとモンゴル」』中近東文化センター.

岩武昭男 (1997) ラシード著作全集の編纂——『ワッサーフ史』著者自筆写本の記述より——『東洋学報』78 (4).

岩武昭男 (2000) モンゴルのイスラーム化の諸相——イフティハールッディーン・カズヴィーニー〜改宗状況〜サーヒブ・キラーン審問〜アルパ招聘——『関西学院史学』27.

井筒俊彦 (1980)『イスラーム哲学の原像』岩波書店.

川本正知 (1989) ナクシュバンディー教団 『世界史への問い』4 岩波書店.

北川誠一 (1997) モンゴルとイスラーム 杉山正明・北川誠一『世界の歴史 9 大モンゴルの時代』中央公論社.

北川誠一 (1999) イスラームとモンゴル『岩波講座世界歴史 10 イスラーム世界の発展』岩波書店.

Landolt, Hermann (1986) *Le révélateur des mystères*, Lagrasse.

Landolt, Hermann (1994) SA'D AL-DĪN ḤAMMŪ'Ī, *EI*[2].

Lewisohn, Leonard (1992) Overview : Iranian Islam and Persianate Sufism. Leonard Lewisohn (ed.), *The Legacy of Mediaeval Persian Sufism*, London & New York.

Ma'ānī, Aḥmad Gulčīn (1972) Ḫānaqāh wa maqbara-yi Ṣadr al-dīn Ibrāhīm b. Sa'd al-dīn Ḥammū'ī Ğuwaynī. *Mağalla-yi dāniškada-yi adabiyyāt wa 'ulūm-i insānī-yi Mašhad* 7 (4), 1350 š./ 1972

Meier, Fritz (1957) *Die Fawā'iḥ al-ğamāl wa-fawātiḥ al-ğalāl des Nağm ad-dīn Kubrā*, Wiesbaden.

Melville, Charles (1990) Pādshāh-i Islām : The Conversion of Sultan Maḥmūd Ghāzān Khān. Charles Melville (ed.), *Pembroke Papers 1 : Persian and Islamic Studies in Honour of P. W. Avery*, Cambridge.

Molé, Marijan (1962) Introduction in IK.

Pouzet, Louis (1991) *Damas au VIIe/XIIIe s. : vie et structures religieuses dans une métropole*

islamique, 2 ème ed., Beyrouth.

Raverty, H. G. (1881) *Ṭabaḳāt-i-Nāṣirī: a General History of the Muḥammadan Dynasties of Asia*, vol. 2, London, rep. 1991.

Richard, Jean (1967) La conversion de Berke et les debuts de l'islamisation de la horde d'Or. *Revue des études islamiques* 35.

Ridgeon, Lloyd (1998) *'Azīz Nasafī*, Richmond.

Sellheim, Rudolf (1976) *Materialien zur arabischen Literaturgeschichte*, I, Wiesbaden.

Teufel, J. K. (1962) *Eine Lebensbeschreibung des Scheichs 'Alī-i Hamadānī: Die Xulāṣat ul-manāqib des Maulānā Nūr ud-dīn Ca'far-i Badaxšī*, Leiden.

Trimingham, John Spencer (1971) *The Sufi Orders in Islam*, Oxford.

van Ess, Josef (1976) Ṣafadī-Splitter. *Der Islam* 53 (2).

Vásáry, István (1990) "History and Legend" in Berke Khan's Conversion to Islam. D. Sinor (ed.), *Aspects of Altaic Civilization III: Proceedings of the Thirtieth Meeting of the Permanent International Altaistic Conference*, Bloomington.

Waley, Muhammad Isa (1992) A Kubrawī Manual of Sufism: The *Fuṣūṣ al-ādāb* of Yaḥyā Bākharzī. Leonard Lewisohn (ed.), *The Legacy of Mediaeval Persian Sufism*, London & New York.

矢島洋一 (1998) 'Alā' al-dawla Simnānī とその教団『史林』81 (5).

(京都大学大学院文学研究科)